□特集 Features

岐路にたつオバマ政権

〈公開シンポジウム〉

岐路にたつオバマ政権――政治・外交・選挙

講師：佐藤丙午（拓殖大学教授）
渡辺将人（北海道大学准教授）
西川　賢（津田塾大学准教授）
司会・討論：佐々木卓也（立教大学教授、アメリカ研究所所長）
日時：2014 年 10 月 24 日（金）18:30-20:30
会場：立教大学池袋キャンパス 14 号館 D501 教室

立教大学アメリカ研究所は、中間選挙を翌月に控えた 2014 年 10 月に外交・安全保障、選挙・政治意識、政治史の専門家を招き、アメリカの現状、オバマ政権の動向について考察するシンポジウム「岐路にたつオバマ政権――政治・外交・選挙」を開催した。

はじめに登壇した佐藤丙午氏は「オバマ政権の外交・安全保障政策の課題」と題し、講演を行った。佐藤氏は、軍事力の使用に抑制的であったオバマ政権の外交・安全保障政策を、世論や経済政策を重視する姿勢から解説し、現状を軍事力の使用や国際秩序が大きく変貌する過渡期に位置していると分析した。さらにアジア戦略について対中関係を中心に詳細な検討を加えた。

続いて「2014 年中間選挙をめぐる文脈」と題して講演を行った渡辺将人氏は、この中間選挙の背後にある潮流を、分極化とイデオロギー対立という論点から分析した。続いて 2010 年中間選挙以降の民主党、共和党それぞれの党内文脈を論じ、2014 年中間選挙については各党の戦略や見通し、さらに接戦州の最新データを紹介するとともに、2016 年大統領選挙との相互作用があることを解説した。

最後に登壇した西川賢氏は、「バラク・オバマ政権の政治成果と統治手法」について講演を行った。西川氏はオバマをカーター以上、フランクリン・ローズヴェルト未満と位置づけ、オバマ政権が上げた立法成果が 2010 年以降小幅なものへと変化したことを時系列順に振り返った。オバマの統治手法については、選挙で活用された SNS を統治の領域に応用することの弊害を指摘し、さらに大統領令の変遷についても検討を加えた。

3 氏の報告に引き続き、質疑応答も行なわれた。

各講師の方々からこのシンポジウムの報告内容をアップデートの上加筆を施し、寄稿していただいた文章を以下に掲載する。